



保険の役割は歳を経るとともに変化 ～“形見分け”への着眼や“見直し”への着手を～

株式会社生活設計塾クルー 取締役／CFP

内藤 眞弓

●リタイア後の備えは保険ではなく貯蓄が有効

リタイアを迎えるに際して心配なことの一つが、病気やケガで医療費がかさむことではないでしょうか。そのため、元気なうちに医療保険に加入しておこうかと考えたり、現役時代にかけてきた生命保険の払込終了時に、入院保障の特約を延長するためにまとまった一時金を払ったりします。

しかし、リタイア後の医療費の備えは保険ではなく貯蓄、つまり現金が最も有効な手段です。なぜなら、医療保険や医療特約はよい医療や介護が受けられるものではなく、契約で定められた条件を満たしたときに、あらかじめ決まった現金が受け取れるものだからです。保険から受けられる給付に見合う現金がすでに手元があれば、わざわざ保険料を払う必要はありません。

●保険は限定条件での現金給付

子どもの教育資金準備や将来に備えて貯蓄をしている現役世代と違い、すでに資産形成も終え、退職金を手にしている方たちにとって重要

なことは、長年にわたって築いた貯蓄をいかに上手に使っていくかに知恵を絞ることです。

大切なお金を医療保険の保険料に回すということは、『契約で定められた入院や手術など』のときにしか受け取れないお金になってしまうことです。たとえば、保険における『入院』とは「医師による治療が必要であり、かつ自宅等での治療が困難なため、約款所定の病院や診療所に入り、常に医師の管理下において治療に専念すること」です。つまり、社会的入院や介護目的の入院などは対象外です。

●現金の備えが日常の暮らしを支える

加齢とともに体力が落ちてきたり、病気になる確率が高くなっていくのは仕方がありません。でも、日常の暮らし方次第で健康に過ごせる期間を延ばしたり、病気になったとしても重篤にならずに済ませることがもある程度は可能です。栄養バランスのとれた食習慣や適度な運動、友人や知人とのおしゃべりも健康を保つ秘訣ですし、早期に発見し治療を

することも重要です。家事がおっくうになってきたときに家事サービスを頼むことも、衛生的な環境を維持したり、食生活の質を保つことにつながります。

高齢になったときの暮らしを支えてくれるのは、これらを日々行っていくためのちょっとした現金の備えです。具合が悪いと思ったときに早めに医者にかかるための費用、リハビリのための費用、通院が辛いときにはタクシーを利用したり、誰かに付き添ってもらったときの心づけなど、暮らしを維持するための現金は使い道に縛られない万能の保険なのです。

●ライフプランと保険の役割

お金に色はついていません。お金で何を購入しようと自由です。お金は価値を測る尺度でもありません。1万円であれば1万円分のモノやサービスを購入することができます。言うなればお金は変幻自在で、手にした人がその価値で交換することが「割に合う」と思うものに交換できる便利な代物です。

現役世代は、住まいを確保するた

めに、あるいは子どもの教育費を準備するために、不意の出費に備えるために、そして、いずれ訪れるリタイア後に備えて貯蓄に励みます。ところが、決して多くはありませんが、リタイアを迎えずして亡くなってしまう方もいらっしゃいます。生きていたら準備できたはずの教育費や家族のための生活費などを、亡くなっただ人に代わってカバーするのが生命保険です。そのための保険料は、与えられなかった時間をかうコストとも考えられます。

無事リタイアを迎えますと、年金収入とこれまで貯めてきた貯蓄を少しずつ取り崩しながら暮らしを続けていきます。このような局面に入りますと、もう生命保険は卒業です。生命保険に頼らなくても、自分の人生を自分の力で全うできる状況に到達したのです。

●お金に想いをこめて保険に託す

ここで、**生命保険の特性を活かして、色がつかないはずのお金にそれぞれの想いや願いを込める方法を考**えてみます。

生命保険は死亡保険金の受取人を

指定して契約できるのが特徴です。被保険者が亡くなると、受取人に指定された人は保険金を請求し、お金を手にします。保険金は受取人固有の財産となりますから、色のついていないお金であっても、確実に指定した人の手にわたります。(注：受取人が未成年者である場合、保険金はいったん親権者に支払われます。)

たとえば、お子さんやお孫さん(未成年者は除く)を受取人にした生命保険に加入します。そして、「A子が欲しがっていた時計を買ってはどうだろう」とか「B君が希望している留学の費用に充ててほしい」など、大切な人への想いと同時に、これらを生きていく人への応援の意味をこめたメッセージを残すのです。色をつかないお金としての自由度は保ちながらも、**願いを込めた形見分け**となるのではないのでしょうか。現役時代の保険料が時間をかうコストだとすれば、リタイア時代の保険料は次世代への仕送りとも言えます。

あわせて、**葬儀の仕方やお墓について**は自分の想いも込めたいという場合は、自分の意志が実現できるように、家族に申し送りしておくなど

の方法を講じることも備えの一つです。

時間の経過とともにそれぞれの希望は変わりますから、メッセージはこまめに書き換えることが重要です。この作業が家族と自分を見つめなおす時間となり、感謝の気持ちを新たにする機会にもなるのではないのでしょうか。

●保険の見直しに三つの方法

現役時代に加入した生命保険が、リタイア近くになって更新を迎える方も多いと思われます。保障内容を変えずにそのまま自動更新をしますと、年齢により保険料が再計算されますので大幅にアップしてしまいます。保険料負担で日々の暮らしが窮屈になったり、行動範囲が狭まったりするのは本末転倒です。

前述のように、保険の役割はだんだん変化していきます。加入したときには、お子さんの教育費や家族のための生活費など、大きな責任を負っていたかもしれません。幸いにも、保険金によってではなく、ご自身の力でそれらの責任を果たしてこられたのですから、もう保険からは

卒業してもよい時期ではないでしょうか。

見直しの方法は三つあります。一つは定期保険特約の自動更新をせずに終身保険部分のみ継続する方法で、保険料は低く抑えられます。二つ目は払済保険への変更です。払い済み保険とは、以降の保険料負担は不要で、その時点での解約返戻金を保険料に充当し、一時払い終身保険に変更するもので、保険金額は小さくなるのが一般的です。定期保険特約や医療特約はすべて消滅します。三つ目は解約して現金を受け取るというものです。

特に今の終身保険の保険金額にこだわらず、**今すぐ現金を手にする必要がなければ、二つ目の払済保険への変更**が有力な選択肢となります。今後の保険料負担は発生せず、万一のときには保険金が支払われ、将来お金が必要なきにはいつでも解約して使うことができます。予定利率はそのまま引き継ぐことが可能です。解約返戻金は時の経過とともに徐々に増えていきます。払済保険を将来の医療費や介護費の備えと位置付けてもよいのではないのでしょうか。